

第二部 パネルディスカッション議事録

コーディネーター

四国大学短期大学部 教授 加渡 いづみ 氏

パネラー

特定非営利活動法人 徳島県消費者協会 会長 佐野 勝代 氏

生活協同組合コープ自然派しこく 理事長 泉川 香 氏

BUTTOBI BERRY ORGANIC 有機いちご生産者 田渕 善昭 氏

NARUMI FARM 有機野菜生産者 阿部 なるみ 氏

株式会社フードハブ・プロジェクト 農業長 白桃 薫 氏

(敬称略)

【司会】

大変お待たせいたしました。ここから第二部のパネルディスカッション「有機農産物をエシカル消費で支える」を開催いたします。只今、予定時刻より若干早く進行しております。第二部のパネルディスカッションは約1時間程度を予定しておりますので、予定より早く終了することを御了承ください。

まずは皆様にパネルディスカッションに御登壇いただきます、皆様を御紹介いたします。コーディネーターといたしまして、四国大学短期大学部教授、加渡 いづみ様を御紹介いたします。加渡様は2005年、金融知識普及功績者表彰、2017年消費者支援功労者表彰を受賞され、企業や学校に出向き、エシカル消費の普及活動に精力的に取り組んでおられます。

続きまして、パネラーの皆様をご紹介します。まず、有機いちご生産者のBUTTOBI BERRY ORGANIC 田渕 善昭様。続いて、有機野菜生産者のNARUMI FARM 阿部 なるみ様、次に株式会社フードハブ・プロジェクト農業長 白桃 薫様。次に生活協同組合コープ自然派しこく 泉川 香様。最後に、特定非営利活動法人徳島県消費者協会会長 佐野 勝代様でございます。以上の皆様です。ここからの進行につきましては、四国大学短期大学部教授、加渡 いづみ様にお願いいたします。

【加渡】

はいありがとうございます。ただいま御紹介をいただきました。四国大学の加渡でございます。徳島県はエシカル消費先進県。SDGs 先進県を標榜しております。私たち消費者は、年々食に対する関心を高めております。それは目の前の商品棚に並んでいる野菜もですが、この農産物はいったいどこで、誰が、どのようにして作ったものなんだろうか。つまり、その一

一つの農産物の持つバックグラウンドやストーリーも含めて非常に高い関心を持っております、

今日のディスカッションのテーマは、「有機農産物をエシカル消費で支える」となっております。地域と食の持続可能性を考える中で、私たち消費者はバイコット。買うことによって、その生産者や商品やお店を応援していく。そのバイコットの行動をこれからどのように考えればいいのか、生産者、流通、消費者の立場からゲストをお招きしながら、今日は皆さんと一緒に有機農業、有機農産物について考えてまいりたいと思います。よろしく願いいたします。

それでは、まず今日お迎えをしております。パネリストの皆様、本当にいろいろなお立場で御登壇をいただいております。生産の立場から、加工の立場から、流通の立場、そして消費者の立場でございます。まずは現在の活動の状況につきまして、お1方ずつ御紹介をお願いしたいと思えます。まず、始めに BUTTOBI BERRY ORGANIC の田渕さんよろしく願いいたします。

【田渕】

BUTTOBI BERRY ORGANIC は、後世に負の遺産を残さない社会構築に貢献できるよう努めていくということを理念としまして、昨年1シーズンを迎えました。今年で2シーズン目のいちご栽培となりますが、昨年の1シーズン目において四国では初の有機 JAS 認証を取り、オーガニック・エコフェスタのいちご部門で最優秀賞をいただきました。

なぜこういうことになったかという、ズバリ一言。BLOF 理論のおかげだと思います。今、農林水産省の方もどうやったら、みどりの食料システム戦略が達成できるかというところで、BLOF 理論という有機農法に大変注目していらっしゃると思います。小祝先生が常に仰ってたのが、どんな方でもどんな初心者でも BLOF 理論をきっちりと実践すれば必ず高品質なものができることを常々お話しされていました。私は農業経験も何もないので、いちご栽培1年目から、とにかく BLOF 理論に徹するしかないと考え、一生懸命いちごの生産をしたところ、本当に高品質な栄養価にしても中身まで証明できるようないちごが生産でき、BLOF 理論ってすごいなって痛感しました。

さらに今年はその BLOF 理論による栽培の精度を上げたところ、味が格段に上がってきました。食物を科学的に理解し、ポテンシャルをどうやって上げてやるかということを考えると、本当に農薬も使わなくても立派ないちごができるということを証明できたと思います。

いちごは4月から苗管理を始め、暑い夏を乗り越えて9月下旬にやっとハウスに定植ができます。そして、そこからハウスの中の管理を始め、年

末から年明けに皆さんのもとにいちごを届けられますが、夏場を乗り切るに当って炭疽病や虫の被害で大変な思いをするんです。

特に炭疽病という怖い病気がありまして、感染すれば必ず死んでしまう。それが広がり、苗が全滅したっていう症例もたくさんあるっていうところで、私が1年目に有機で育苗をやると言ったところ、農業支援センターの方が心配して飛んできてくれました。田淵さん本当にいちごを有機でやるんですか。BLOF理論を習ったんで、徹底的にやってみたいと思います。やめた方がいい。絶対やめた方がいい。まずは普通にやってみて3年5年たって、それから挑戦すればいいんじゃないですか。ものすごく心配してくれたんですけども、もう今年は初年度なんですけど、とにかく有機JAS認証を取るのが一番の目標だったので、絶対農薬は使わない、何か全滅したら苗を買うという覚悟で育苗に取りかかりました。取りかかる当初に炭疽病の検査をしてくれました。そしたら、育苗全体のもう既に7割が炭疽病に感染していると。夏を乗り越えられず間違いなく全滅します。と言い切られましたが、BLOF理論を理解し、微生物を活用した管理を続けたところ、苗がいっぱい余りました。

去年の炭疽病率が全体の5%。さらに今年は去年の教訓を生かしていろんな改良を加えたところ、6月の初め炭疽病率100%でスタートしました。結果、炭素病率2%までに下がりました。農薬なんか使わなくてもできるんです。みんな頭からできないと思っているからできないだけなんです。難しいいちごでもやればできるんです。政府の方がみどりの食料システム戦略で大きな目標を立てて追い風が吹き始めました。これからますます有機農業が盛んになっていき、そうした技術の確立も進んでいくと思います。それでいつかこの社会からオーガニックという言葉さえなくなるような社会が来ることを私は強く望んでおります。短いんですけど、ありがとうございました。

【加渡】

ありがとうございました。せっかく大きなパネルを持って来てくださってますので田淵さん説明をお願いできますか。あと、私から質問ですが、「BUTTOBI」という名前の由来は何でしょうか。

【田淵】

ぶっ飛びって言えば何かスラングでぶっ飛んで変なやつだとか俗語のイメージがあるんですが、本来の意味は高く突き抜けるとか、とんでもないといった意味があります。どうせやるなら本当に世界一のいちごを作ろう、誰もかなわないようないちごを作りたいなという思いでぶっ飛びっていう名前にしたんです。

今回パネルを持ってこさせていただいたんですが、現在、うちのいちごや日本で流通しているいちごの容器は、ほとんどプラスチック素材に入って販売してると思うんです。けれど、これ西洋諸国に行ったらプラスチック素材はオーガニックじゃないじゃないと言われるそうです。こういうプラスチックを使うことは社会環境を守っていない、オーガニックじゃないよって言われるそうです。これから日本が食料システム戦略で有機が進んでいく中で、先陣を切ってプラスチックの使用をやめようって思って相談したところ、いい段ボール屋さんと知り合うことができました。現在は、段ボール製の箱を使っています。有機 JAS 認証のシールも最新技術によってケースに印字ができ資源の節約にもなる。印刷屋さんも持続可能な社会を目指した仕事がしたいということで、つい最近知り合いました。ポスターも段ボールなんです。上質紙を使わなくても、段ボールでできる世の中になってるんです。とりあえず農産物に限ったことでスタートするんですけど、こういった梱包資材に関しても過剰包装をやめて、資源を守るようなことが本当のオーガニックだよという意識が、日本人の中にも浸透していくようになってもらえればなと思い御紹介させていただきました。

【加渡】

ありがとうございました。それでは続きまして、NARUMI FARM の阿部様よろしく願いいたします。

【阿部】

皆さん、こんにちは上勝町の山の上でオーガニックトマトを中心に6反の畑をやっている。NARUMI FARM 阿部 なるみと申します。私は、徳島県に来るまでは東京で海外関係のプロジェクトで働いて普通に会社員をしていました。農業はすごく興味があって体験ですとか、勉強会とか、そういうのにはしょっちゅう参加してたんですけど、実際に大根を抜いたのは9年前が初めてといった。何も知らない未経験で大阪出身です。何もわかってなくて、田舎に住んだこともなくて、車も運転できないっていうところから始まりました。

きっかけは、20代の頃に私はアメリカのニューヨークの大都市の大学で学んでいました。たまたま選んだ学校がそこにあったというだけで、ニューヨークは派手なイメージがありますが、勉強が大変でもう本当に遊ぶ暇もないくらいテストとか課題に追われた大変な学生生活でした。その時もみんな若いんですが、あの町ではオーガニックマルシェとかがいたるところで開かれていて、私たちは体調を崩したり、風邪をひいたりしたら真っ先にそこに行ってオレンジジュースとかリンゴジュースを買って1リットル飲んだら風邪が治るとみんな言っていて、風邪をひいたら真っ先にそう

いうオーガニックジュースを飲んでました。そういう感じで、オーガニックのレストランとかカフェもいっぱいあり、身近にオーガニックのものが安く手に入るという環境で学生時代を過ごしました。

帰国してから東京でOLをしてたんですけども、もう仕事が本当に大変で、その時も体調を崩したときは、あのスーパーに行って野菜を買うのが趣味な感じで、そこでちょっとエネルギーとかパワーチャージをしてたっていう感じでした。そこから、もうちょっと自分の好きなことをやりたいなと思って、2014年におばあちゃんたちの「つまもの」で有名な上勝町に農業体験に来ました。農業をやったら生活田舎でできるかなと思って、その後に高知県の土佐自然塾に入り、今はなき山下一穂さんという土まるごと堆肥化で有名な有機農業の先生がいらっしゃる学校に1年通いました。

そこは、一年中朝5時から夜10時まで出荷と栽培で休みがなく、15人中5人が辞めるっていうスパルタの学校で、1年中夏も冬も外にいるという経験をして、そこで私は何もわかってなかったんですけども、根性だけはついて、何とかなるみたいなことがわかって、今上勝町の山の上で6反の畑をほぼ一人でやってます。最初はオーガニックトマトでマルチも全部使ってやってたんですけども、だんだん露地野菜とかもやり出して、自分の体力を考え出して、その時に自然がやってくれるんだなっていうことがわかってきたんですね。今はもう不耕起の自然栽培を半分以上やってまして、トマトも5年間耕していません。今は世界で不耕起栽培がすごく注目されています。

日本は80%が山間部の国土なので、私は山間部でできる農業を探したいなどの思いと、女性でもできる農業というところもすごく興味があります。誰もほとんどやってないですし、難しいとされてますけども、無肥料不耕起とかでも野菜が育つんだなということが本当に分かってきて、人間の想像を超える自然の世界があるんだなということが、8年目にしてわかってきたところです。

あと加工品も作っていますが、野菜とかトマトの廃棄を減らしゼロ廃棄にしたいので加工品も作っています。

上勝町はゼロウェイストでも有名な町で、家のハウスも全部リサイクル資材を使っています。最初は初期投資が1,000万円以上とか、皆さん投資されてるんですけど、ちょっとハードルが高いと思ってほとんど自分で作ったりしてやってます。上勝町には何でもくるくるショップがあっという間にないものをいただいたり、もう町中の人やがやっていて、私も利用させていただいています。いろんな農機具も貰え、今日着ているこの赤いフリースもそこからいただいたものです。まあそうした農業ですが、ものが循環する暮らしを楽しんでできるような仕組みができればなと思っています。今

日は女性としていろいろ意見が言えたらいいなと思って参加させていただいてます。皆さんよろしく願います。

【加渡】

ありがとうございました。続きまして、株式会社フードハブ・プロジェクト白桃さんお願いいたします。

【白桃】

皆さん、こんにちは、フードハブ・プロジェクトの白桃と申します。よろしく願います。

私は神山から今日やってまいりました。我々がやっているのをもしかしたら「かまパンストア」とか、「かま屋」をご存知の方はいらっしゃるでしょうか。ありがとうございます。神山でそういったパン屋さんとか食堂を自社で育てたお野菜を使ったそういったお店をやっております。前のスライドにもあるように、農業法人株式会社フードハブ・プロジェクトということで、我々がやっているのは、本質的にはやっぱり農業ですね。農業を中心に生産を中心に6次産業化、加工とかまでやっているような取り組みになります。

我々やっていること、食の地域内循環システムということで、地域の中で我々農業なので食ですね。食を中心に、それが地域の中で循環して、お金も食べ物も循環していくようなそんな小さな仕組みを神山でやっております。我々少しやり過ぎていたので、説明が難しいところはあるんですけど、真ん中にあるのは、全国的な話で農家さんがどんどん減ってきているということで、耕作放棄とかいろいろな問題が起こってますが、それを中心に置いて農家さんを育成する取組を進めています。それを支えるために地域の人たちが地域で育てたものを地域の人たちが食べて、その食べた消費行動がその人たちを育てる仕組みを回していく。お金に使われるということで、食べ支えていくという行動を起こすために先程言った食堂とかパン屋さんとかですね。そこで消費行動を起こすことによって、その仕組みが支えられていくというような物事になっております。

そのほかにも学校給食とか子供たちへの給食教育も含めて、一緒に食べる人も地域の農業とか食文化を考えられるような機会をつくることをやっています。今日は有機農業フェアということなので、我々の農業のところを少し詳しく話します。資料のスライドにもありますが、育てるっていうところなんですけど、我々は人を育てるところが有機農家さんを育てましょうということで、農林水産省の準備型という学ぶ研修制度を使わせていただきながら、有機栽培や一部お米に関しては特別栽培や化学肥料を不使用で農薬を減農薬で育てたりしています。また、種を継ぐというこ

とで、地域で 80 年前から採っているお米の種とか、小麦の種があるので、それを継いでいこうみたいなことに取り組んでいます。農業の技術的な面は田淵さんと同じで BLOF 理論に取り組んでいます。本当にありがたいことで誰でも有機農業をできるようにちゃんと学ぶことができます。うちにも研修生が毎年素人の、農業をやったことない方がたくさん来られます。土も触ったことないですってという方が 1 年ぐらい有機農業をやって研修が終わった頃には、農家として 1 人前になれるようなそんな農業をサポートできるような技術もあります。そういうものを使いながら、ベーシックな有機農業をやれる農家になります。それで、いろいろ組み合わせて、地域の方たちに有機農産物を届けています。今の時期ですと地元のキョーエイさんとかに有機にんじんが置いてありますので、是非皆さんも見かけたら我々の農家さんを育てる仕組みを食べて支えていただければと思います。簡単にですけど紹介させてください。

【加渡】

どうもありがとうございます。続きまして、コープ自然派しこく 泉川さんお願いいたします。

【泉川】

皆様こんにちは。泉川です。よろしくお願いいたします。コープ自然派では「誰もが有機農産物を食べることができる社会」をスローガンに、私たちのみどり戦略を進めようと様々な取り組みを進めています。

2009 年に徳島県小松島市に、2012 年に熊本県山都町にそれぞれ有機農業を志す人のための学校を開設しました。先ほどからお話に何度も出てくる BLOF 理論を学ぶことができる学校です。最近では、組合員を巻き込んだ収穫体験などの活動に力を入れております。

真ん中の写真ですけれども、数年前から何年も継続して行っている田んぼの生き物調査の親子イベントで、毎年人気のイベントとなっております。商品カタログ上で環境支払いカンパという形で組合員からカンパを募り、鳴門市のビオトープ整備や兵庫県朝来市のコウノトリの巣塔設置などに活用いたしました。真ん中の大きい写真ですが、2022 年北海道アンバサダーとして国産有機小麦 1,000 トンの生産を目指すと言ってくださった大規模循環農業を実践されている生産者の圃場を見学した時のものです。訪れた理事が学んだことや体験したことを持ち帰り、多くの組合員に知ってもらうためにイベントとして報告会や試食会を開催しました。

一番右ですが、JA 東とくしまと連携してネオニコチノイド系農薬不使用を実現して、昨年 11 月より小松島市の幼小中学校の学校給食に無農薬米の納入が始まっています。以上報告とさせていただきます。